新刊紹介

近世教育思想に於ける 内在觀の研究　由良哲次著

本書は目下ドイツに遊學中の由良君が外遊に先立ち、研究上の記念として、故國に遺して置かれたものである。

由來我が國の教育學界には、その理論的研究に業績をあげた人は少くないが、歴史的研究は比較的に缺けてゐる。これは我が國の教育學界の重大な短所である。從來この方面に新しい研究家の進出されんことが大いに希望されてゐた。今由良君のこの著は第十八世紀に於ける三人の偉大なる天才、即ちルソー、ペスタロッチー、ゲーテの思想をその時代、その傳記、その著述に照らし、かつ三人以前の思想と三人の思想の關係を伺ひ、三人とその後の思想との關係をも明かにして、仔細に三人の教育思想を解明せんとしたものである。

先づ筆を「近世思想の開展と内在觀」なる緒論より書起し、その中で新プラトーの哲學、中世の　文哲學、アウグスチヌスなどより、ルネッサンス時代の神祕思想、近世に於ける經驗論と理性論近世思想の特質としての内在觀などを叙述して、ルソー以下三人の思想の由つて來る所を明かにしてゐる。

次に「ルソー」、次に「ペスタロッチー」、次に「ゲーテの哲學思想とその教育觀」と篇を分つて叙べてある。特にルソーについては從來淺く解釋された「自然」の意味に、深い意味を索め、その自然主義的教育とは、「無理想なる放任主義」ではなく、「人の根本本質として生命と意識の根本に作らける自然、作らきそのものとしての原理の指向のまゝに伸長せしめ、阻害するものを去らんとするいはゞ一元的理想主義である」と斷じたる如き、ペスタロッチーに於て最も根本的概念と認められる Wahrheit を究明して「人はその本質の基底に神をもち、神は直接に人の内面に於てのみ眞理として作らく。神は眞理として自然の中に内在し示現することによつて陶冶の永遠性を創造し且つ保持する。神人の合一、人に於ける神、神に於ける人、これ眞理の眞の意味であり、陶冶の根本意義であると解したるが如き、更にゲーテに於て、その調和的藝術的活動的にして「人性の自然をも信と愛とを以て眺め、」「人はたとひ缺點多く迷誤に滿ちてゐようとも、その深き本質にては眞と善とに向はしめられてゐる」といふ樂天的な目的論的な特質を捉へて以てゲーテの名著ウイルヘルムマイスターに表現された教育思想の特色たる、畏敬敬虔に及んでゐる。

ルソー、ペスタロッチー、ゲーテに就ての史的記述は必ずしも三者の全豹を說き盡くすまでに廣汎に亘つてゐない。たゞゲーテには本書の半ば以上、即ち一六〇頁ほどを費して精微詳細に述べてあるので、ゲーテの哲學、教育思想に就てはほゞ全ての問題を網羅してあると言ひうるが、他の二人に就ては各々四五十頁程度に止つてゐるから、決して、此の人々の凡べてに亘つて研究を遂くしたわけではない。折角ゲーテに就て、これだけ豐富な研究を試みてあるから他の二人にも同樣に詳細な研究を下されたらばと嘱望されるのである。しかしこの著は因より一般的概括的說明を

求めようとして企てられたのではなからう。著者は三人の天才の思想上に或要所、力點を見出し、この力點に就ては全力を盡くして説述を試みてゐる。從來の史書に多く見受けたやうな表面的皮相的な觀察を羅列するのではなく、著者の深い哲學的素養を巧に利用して、この三人の思想を內面的に本質的に理會せんと試みられたものである。右の點に就ては、乙竹教授の序文にある如くで從來の教育史書に較べて、更に一歩を踏み昇つてゐる所があると書いて居られるのも、過褒では無いと信ずる。

終に著者に對して、將來、この三人以外の他の大教育家についても詳細な內面的研究を順次になしとげられんことを希望して止まない。尙西洋人名の讀み方にアウガスチヌス(目次にはオーガスチヌス)、コンデイラックの如く、如何にやと思はれるものが二三ある。取りたてゝ擧げるほどの疵ではないが、十分の上にも十分を望むがまゝに、かゝる微疵をも取上げて以て擱筆する。(東京市京橋區南傳馬町二丁目、目黑書店發行、菊版定價貳圓八拾錢)

(紹介者高橋俊乘)

前號目次

梵文唯識二十論和譯並びに註解……稻津紀三
文學の體系……文學士　園賴三
カントの第一アンチノミー第一部と先驗的觀念論……文學士　相原信作
彙報……